

# 長期研修派遣教員による在籍校への 行動コンサルテーションの効果（2）

—中学校特別支援学級に在籍するディスレクシアの生徒に対する英単語の学習指導を通して—

○須藤邦彦 松岡勝彦  
 (山口大学教育学部) (山口大学教育学部)  
 KEY WORDS: ディスレクシア、英単語、学習指導

## はじめに

本研究では、長期研修派遣教員（以下、長研生）が大学教員と連携を取りながら、在籍校の教員ならびに英単語を記憶することが困難なディスレクシア生徒に対する行動コンサルテーションを実施し、その効果とコンサルテーションのあり方について検討することとした。

## 方法

**研究協力者：**公立中学校特別支援学級に在籍する2年生男子生徒1名と長期研修生（主にコンサルタント）、ならびに英語授業を担当している教員（コンサルティ）が参加した。本生徒は、小学校5年時にディスレクシアの診断を受け、二次障害とみられる集団不適応があったこともあり特別支援学級への在籍措置となった。英語学習への抵抗感がややあり、文字や読みと意味を単純に対呈し続ける学習方法では、直前に覚えた単語も再生できなかった。その一方で、教科書や黒板に記された位置や音の語呂合わせなどによって語句の意味や関連する内容を記憶し、試験などで正しく再生している様子も散見された。研究開始前に本生徒の保護者と上記教員、ならびに管理職に研究参加の承諾を書面にて取り付けた。**研究場面：**上記生徒が在籍する特別支援学級において、筆頭発表者のスーパーヴァイズの元で、上述した教員が支援を行った。**標的単語：**支援日程や時間、本生徒の動機付け、教科書に指定されている重要英単語、公立・私立高校の入試問題での出現頻度、これまでの学習度合いなどを考慮して50単語を抽出した。**課題設定：**上述した英単語を、日本語での意味や支援する記憶方略のパターン、あるいは支援日程を考慮したうえで、9グループ（1グループ辺り5-6単語）に分けて支援を行った。具体的には、例えばWriteであれば「ライトをつけて“書く”」などのように、英単語の音と日本語の意味をイメージによってつなげた短文を作成し、記憶再生の手がかりとするパターン（以下、「音-意味短文」）、例えば6つの疑問詞のような複数の英単語を文脈のある物語（この場合は桃太郎の

冒頭部分）と関連づけて記憶再生させるパターン（以下、「物語関連文」）、例えば「きのう-きょう-あした」のような、単語の意味の関連性や順序性を表にし、それを英単語と関連させて記憶再生を促すパターン（以下、「音-位置関連図」）、そして例えば「これ、それ、あれ」のように、単語の意味の関連性（この場合は物理的距離）を図式化し、記憶再生の手がかりとするパターン（以下、「音-図イメージ」）を記憶方略とした。そして、「音-意味短文」を5グループ（以下、1G、2G、7G、8G、9G）、「物語関連文」を1グループ（以下、3G）、「音-位置関連図」を2グループ（以下、4G、5G）、「音-図イメージ」を1グループ（以下、6G）とした。**研究デザインと手続き：**プレ・ポストテスト研究デザインを用いた。プレテストでは、全ての英単語（50問）を教員が口頭で提示し、その意味を口頭で答えさせた。1Gから9Gまでの指導期間では、グループ分けしたそれぞれの英単語を対象に、①前述した記憶方略に則って単語を学習する、②学習した直後にテストを行う（直後テスト）、③数日後の英語の授業開始時にテストを行う（授業テスト1）、④その英語の授業終了時に再度テストを行う（授業テスト2）という流れで実施した。上記②から④のテストは、英単語の数が5から6個であったこと以外は、プレテストと同様の手続きで実施した。ポストテストは、全ての英単語（50問）を対象に、プレテストと同様の手続きで2回実施した。**指導期間：**指導期間は、X年1月-3月までの合計30回（自立活動12回、授業18回）で、1回辺り10-15分程度実施とした。

## 結果

プレテストとポストテストは、全ての英単語（50問）に対する正答率を、指導期間は直後テストと授業テスト1、2の正答率の推移を積み上げ式のグラフ（図1）で示した。プレテストでは正答率が26%であったものの、それぞれのグループのテストにおいて80から100%の正答率を示し、ポストテストでは98%と96%を示した。また、指導期間中のテストやポストテスト時に、指導した記憶方略を用いて英単語の意味を想起しようとする行動が何度も確認された。

## 考察

結果から、本研究で用いた4つの記憶方略が本生徒の学習において有効であることが示唆された。そして、学習者の得意な（あるいは既に自発している）記憶方略に沿った支援指導方法を査定・考案し、活用することの有効性が推測された。また、このような支援対象者の特性を分析するとともに、実際の実践現場の実情に沿って指導を系統的に展開していくコンサルテーションの専門生を長期派遣教員が実践を通して獲得していく重要性も推測された。

(SUTO Kunihiro, MATSUOKA Katsuhiko)

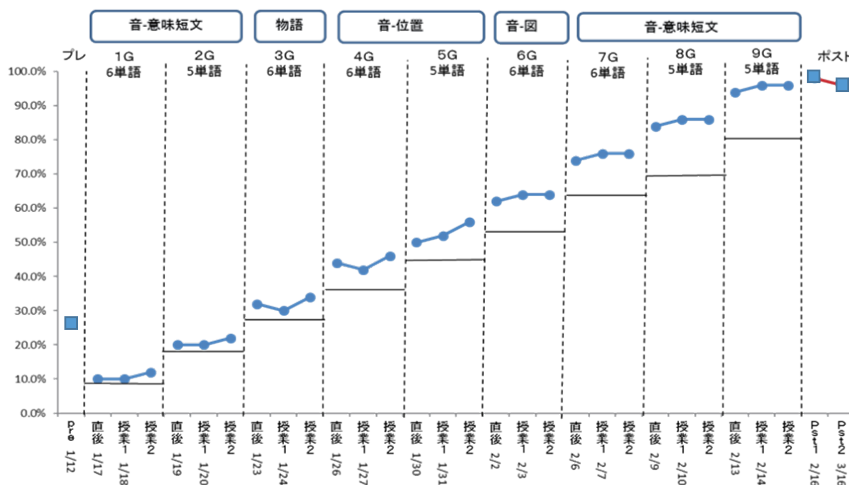


図1 正答率の推移 (積み上げ)